

「つたえること・つたわるもの」№194

「〈ゆるし〉のちから」——三浦綾子／「誰にも人生の踏絵がある」——遠藤周作

健康ジャーナリスト 原山建郎

★ 西欧から伝えられ、日本の宗教風土で発芽した「ひと粒の麦」——キリスト教の「実生化」

日本を代表するキリスト教作家、三浦綾子さん、遠藤周作さんがめざしたものは——戦国時代(1549年)、西欧のイエズス会から派遣された宣教師、フランシスコ・ザビエルらによって伝えられた「舶来」のキリスト教を、そのまま「接ぎ木・挿し木」したクローン(遺伝子コピー、栄養生殖)ではありません。日本の宗教風土にポトリと落ちた「ひと粒の麦(福音)」が、日本で実生化(有性生殖で作られた種子から小さな苗が発芽)したキリスト教であり、日本人のキリスト教を求めてやまなかつた三浦さん、そして遠藤さんが自らの「病い」を深く見つめ、「神さま」を祈り求めた人生を通して——お二人それぞれの歴史的な身体(精神的土壌)を通して発芽した苗に花が咲き、やがて三浦さんは『氷点』『続氷点』、遠藤さんは『沈黙』などの作品を、二十一世紀に生きる、私たち日本人のところに届く——「果実」として世に送り出したのです。



実生(種から発芽する)／挿し木(枝の一部を地に挿す)



接ぎ木(別の植物の切り口に、枝を接合する)

「総まとめ」『「〈ゆるし〉のちから」——三浦綾子／「誰にも人生の踏絵がある」——遠藤周作』に共通するキーワード、「実生化」という言葉は、〈異文化におけるキリスト教の実生化(インカルチュレーション)〉を研究テーマの一つとしている桜美林大学准教授、長谷川(間瀬)恵美さんの研究論文「遠藤周作とキリスト教の実生化」からヒントを得ました。

この論文の冒頭には、次の一文が載っています。

キリスト教が異文化に移植される形態(土着化)は、通常「文化適応」、「文化内受肉」、「異文化内開花」等と邦訳されるか、もしくはカタカナでそのまま「インカルチュレーション」と表記される。私はそれに対して「実生化」という言葉を提唱している。

「実生化」の玄義(幽玄な教義)は聖書に因る。幾世紀も前にエルサレムの大地に落ちた「一粒の麦」が実を結び、弟子たちの福音伝道とともに世界に蒔かれ、日本の大地においても根を張り、出芽し、成長し、花開する。「実生化」は、キリスト教の信仰に基づいたメタフォリカル(暗喩的)な表現である。遠藤周作(1923-1996)の文学活動における宗教的テーマは、いかにしてキリスト教が日本の宗教風土のもとで開花することができるかという問いであった。遠藤は文学作品において終始、日本の文化・思想に生きる日本人の心に共感しうるキリスト教を表現することに努めた。ゆえに、私は遠藤周作の文学を「キリスト教の実生化」をテーマとした文学活動であったと考えている。

(2010年、京都大学文学部「アジアの宗教と多元性」研究会で発表した論考より抜粋)

たとえば、長谷川(間瀬)恵美さんが提起した「日本におけるキリスト教の実生化」を、三浦綾子さん、遠藤周作さんの小説のなかで、どのようにとらえたらよいのか、昨年、一昨年と文教大学の社会人講座で行った『遠藤周作の「病い」と「神さま」』講座、今年行った『三浦綾子の「病い」と「神さま」』講座をふり振り返りながら、お二人のキリスト教作家の元担当編集者であった私の、「総まとめ」としたいと思います。

1. 「〈ゆるし〉のちから」——三浦綾子



今、「ゆるし」がほしのです。私の血の中を流れる罪を、ハッキリと「ゆるす」と言ってくれる権威あるものがほしい。
(『氷点』／『続氷点』)

『氷点』の主人公、陽子は、——自分を育ててくれた井口啓造・夏枝夫妻の一人娘、ルリ子を殺した父（佐石土雄）の子である——と知って、「わたしは罪人の子だ」と思いつめ、生きる力を失って自殺をはかろうとします。そして、陽子が書いた「遺書」には、心の葛藤をあらゆる逆接の接続詞〈しかし〉〈けれども〉〈でも〉、そして陽子の心にあった——水が氷結する温度——〈氷点〉、漢字の「許し・赦し」ではなく、ひらがなの〈ゆるし〉〈ゆるす〉という言葉が出てきます。（引用文中の下線、太字表記は原山。以下同じ）

★陽子の「遺書」

——自分は井口夫妻の一人娘、ルリ子を殺した父（殺人者）の子であると思いつめ、自殺をはかろうとする陽子。

長い間、辻口家の娘として育ててくださった御恩に、何のおむくいすることもなく、死んでしまうということは、ほんとうに申しわけないことと思います。（中略）自殺ということは、まちがっていると、今も思っております。どんな理由があるにせよ、自殺ということ、私は決してよいことだとは思っておりません。でも、悪いと知りつつ、私はやはり死ぬことにいたしました。（中略）

中学の卒業式の時、答辞が白紙になっていた時には、おかあさん（今は、こう呼ぶことをおゆるし下さい）の意地の悪さに驚きました。私は生意気にも、「こんな意地の悪い人のためには、どんなことがあっても、自分の性格をゆがませたりする愚かなことはすまい。私を困らせようとするならば困るまいぞ、苦しめようとするのなら苦しむまいぞ」

という不敵な覚悟で、少なくとも表面はかなり明るく振舞って生きて来たのでした。

しかし、私がルリ子姉さんを殺した憎むべき者の娘であることが分かった今は、おかあさん（※ここでは井口夏枝のこと。しかし、のちに育ての母が、三井恵子であることを知る）が、私に対してなされた意地悪も、決して恨んでおりません。ああなされたのは当然であると思います。当然というより、どんなにおつらい毎日であったことかと、心からお気の毒でなりません。（中略）

しかし、自分の父が、幼いルリ子姉さんの命を奪ったと知った時、私はぐらぐらと地の揺れ動くのを感じました。

今まで、どんなにつらい時でも、じっと耐えることができたのは、自分は決して悪くないのだ、自分は正しいのだ、無垢なのだという思いに支えられていたからでした。でも、殺人者の娘であることが分かった今、私は私のよって立つ所を失いました。（中略）

自分さえ正しければ、私はたとえ貧しかろうと、人に悪口を言われようと、意地悪くいじめられようと、胸をはって生きて行ける強い人間でした。そんなことで損なわれることのない人間でした。何故なら、それは自分のソトのことですから。

しかし、自分の中の罪の可能性を見出した私は、生きる望みを失いました。どんな時でもいじけることのなかった私。陽子という名のように、この世の光の如く明るく生きようとした私は、おかあさんからごらんになると、腹の立つほどふてぶてしい人間だったことでしょう。

けれども、いま陽子は思います。一途に精いっぱい生きて来た陽子の心にも氷点があったのだということ。

私の心は凍えてしまいました。陽子の氷点は、「お前は罪人の子だ」というところにあったのです。私はもう、人の前に顔を上げることができません。どんな小さな子供の前にも。この罪ある自分であるという事実を耐えて生きて行く時にこそ、ほんとうの生き方がわかるのだという気もいたします。

私にはそれができませんでした。残念に思いますけれども、私にはもう生きる力がなくなりました。凍えてしまったのです。おとうさん、おかあさん、どうかルリ子姉さんを殺した父をおゆるし下さい。

今、こう書いた瞬間、「ゆるし」という言葉にハツとするような思いでした。私は今まで、こんなに人にゆるしてほしいと思ったことはありませんでした。

けれども、今、「ゆるし」がほしのです。おとうさまに、おかあさまに、世界のすべての人々に。私の血の中を流れる罪を、ハッキリと「ゆるす」と言ってくれる権威あるものがほしいのです。

（三浦綾子小説選集1 『氷点』394～396 ページ）

さらに、『続氷点』では、自殺未遂後の長い昏睡状態から醒めた陽子が、「本当は、井口啓造の大学同窓生、中川光夫が、三井弥吉の妻・恵子と不倫して生まれた子どもだった」ことを知ります。

井口啓造が持たせた聖書の「ヨハネ伝第八章」には——律法が禁じた姦淫の罪を犯した女を殺せといき

り立つ群衆に対して、イエスは姦淫の女を石で打たなかった。その女をただあなたたかくゆるしただけだった——と書かれていました。

陽子は考えます。

なぜイエスは姦淫の罪を犯したその女をゆるしたのだろうか。罪は、たとえ人間の命をもってしても、根本的につぐない得ないものだからでもあろうか。確かに罪とは、ゆるされる以外にどうしようもないものなのかも知れない——

そして、陽子は生みの母である、三井恵子の家に電話をかけるのでした。

(おかあさん! ごめんなさい)

★ 一度は死を選んだ陽子に訪れる——たましいの再生と「ゆるし」——「慰め」のものがたり。

「汝らのうち罪なきもの、この女にまず石を擲(なげう)て」——ヨハネによる福音書第八章七節

陽子は、けさ聖書を読んだ。旭川を発つ時、啓造がくれたものだった。陽子のために買っておいただろう。えんじ色のクロス張りの聖書に、細い紙片が、しおりのようにはさんであった。紙片には、

「陽子、ヨハネ福音書第八章一節から十一節までを、ぜひ読んでおくこと。父」

と、短く書いてあった。

その箇所には、姦通の現場から引きずり出されて来た女が、衆人に石で打ち殺されるか、どうかという場面が記されていた。

当時のユダヤの律法によれば、姦通罪は死刑であった。しかも、石をもって打ち殺せというのだ。宗教学者や信仰の篤い男たちが、その女をイエスの前に突き出し、

「こういう女はおきてでは石で打ち殺すことになっているが、あなたはどうか」

と、迫った。おきてのとおりには殺せといえ、愛を説く日ごろの言動に矛盾し、且つ時の支配者ローマ帝国の法律に違反する。殺すなどいけば、ユダヤの律法をふみにじることになる。どう答えてもイエスを、窮地に追いこみ得ると見た意地の悪い質問だった。

イエスは沈黙した。そして身をかがめた。そして指で地面に何かを書いた。

彼らは執拗に回答を迫った。イエスは彼らを見まわしていった。

「あなたがたの中で、罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」

再びイエスは、地面に何かを書きつけた。

一人が去り、二人が姿を消し、やがて残ったのは、イエスと女だけであった。

「あなたがたの中で、罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」

その言葉に、啓造は太い朱線を引いておいた。陽子は痛かった。(※生みの母である、三井) 恵子の存在を知って以来の陽子の心を、啓造はむろん知っている。そして陽子が、恵子に初めてあった日のことも、伝え聞いているにちがいない。「陽子さん、ゆるして……」

恵子の黒い目に涙が盛り上がったのを見ると、陽子は黙って傍を離れた。そして、廊下を曲がり、手術室のほうに、用ある人のように足早に歩いて行った。(中略)

「陽子さん、ゆるして……」

その一言には万感の思いがこめられていたはずである。しかし陽子は、素っ気なくその場を立ち去ったのだ。それは、石を投げ打つよりも冷酷な仕打ちではなかったか。

(原罪!)

陽子は、ふと啓造から聞いた言葉を思い出した。ようやく、自分の心の底にひそむ醜さが、きびしい大氷原を前にして、はじめてわかったような気がした。

石を投げ打つ資格は、一人イエスにはあったにちがいない。だがイエスは、姦淫の女を石で打たなかった。イエスはただあなたたかくゆるしただけだった。陽子はそのことを思い返さずにはいられなかった。

(しかし、なぜ……)

なぜイエスはゆるしたのであろう。罪は、たとえ人間の命をもってしても、根本的につぐない得ないものだからでもあろうか。確かに罪とは、ゆるされる以外にどうしようもないものなのかも知れない。

流水の上の空が、ひとところばら色にあかねしている。曇天の日のあかねを、陽子は珍しく思った。(中略)

と、光が一筋、流水の原に投げかけられた。査問ピンクの細い帯が、氷原を染めた。夕光は、宿の裏山のほうからさしているようだった。(中略)

やがて、その紅の色は、ぼとり、ぼとりと、サモンピンに染められた氷原の上に、右から左へと同じ間隔をおいてふえて行く。と、その血にも似た紅が、火炎のようにめらめらと燃えはじめた。(中略)

じっと、そのゆらぐ炎をみつめる自分の心に、ふしぎな光が一筋、さしこむのを陽子は感じた。

またしても、ぼとりと、血の滴るように流氷が滲んで行く。

(天からの血)

そう思った瞬間、陽子は、キリストが十字架に流されたという血潮を、今目の前に見せられているような、深い感動を覚えた。(中略)

(何と人間は小さな存在であろう)

あざやかな炎の色を見つめながら、陽子は、いまこそ人間の罪を真にゆるし得る神のあることを思った。神の子の聖なる生命でしか、罪はあがない得ないものであると、順子から聞いていたことが、いまは素直に信じられた。この非情な自分をゆるし、だまって受け入れてくれる方がいる。なぜ、そのことがいままで信じられなかったのか、陽子はふしぎだった。(中略)

陽子はつと立って、北原(※陽子の恋人)に電話をしようと思った。が、何よりも先に、なさねばならぬことがあった。

交換手が出た。陽子は、小樽の(※生みの母である三井恵子の夫)三井弥吉の電話番号を調べて、とりついでもらうことにした。

「受話器を一たん置いて、お待ちください」

ベルが鳴るまでの僅かな時間が、陽子にはひどく長く感じられた。

(おかあさん! ごめんなさい)

あの雪道をうつむいたまま去って行った恵子の背に、呼びかけるような思いだった。

二、三分たって、ベルが鳴った。

「ただいま、お呼びしています。そのままお待ちください」

交換手の声がして、コールサインの鳴るのが聞こえた。陽子は受話器を強く耳に押し当てた。

ふいに陽子の目から涙が溢れた。その涙をぬぐおうともせず、陽子はコールサインに耳を傾けていた。(三浦綾子小説選集2 『続氷点』398~405ページ)



「踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。」
(『沈黙』)

『人生の踏絵』(遠藤周作著、新潮社、2009年→新潮文庫、2019年)は、1996年の帰天後、それまでの講演(口述)を活字化したものですが、その中から『沈黙』のテーマ(主題)、モチーフ(執筆の動機)にかかわる講演録を読みました。

同書の前書き「人生にも踏絵があるのだから」には、かつて遠藤さんが戦争中から自分が弱いせいで何度も踏絵を踏みながら生きてきて、一時は心臓停止したものの奇跡的に回復した三回目の手術のあと、病床で浮かんだ踏絵のイメージから「自分が江戸時代のキリシタンだったら、間違いなく踏絵を踏んでいた。では、その時、どんな気持で踏むのだろうか」と考えるようになり、踏絵を踏んだ人々(転びキリシタン)について調べ始めた、と書かれています。

★ なぜ神は黙っているのか

彼らの嘆きに声を与え、彼らに言いたかったことを少しでも言わせ、もう一度彼らを歩かせながら彼らの悲しみを考えていくというのは、政治家でも歴史家でもなく、これはやはり小説家の仕事です。

しかし、踏絵を踏んでしまった人、すなわちフェレイラとかキアラ(※実在の神父。ジュゼッペ・キアラ神父=『沈黙』ではロドリゴ神父)といった人たちのことはほんのわずかな記録しか残されていません。「臭いものには蓋をしる」で、教会は布教史上の汚点として残さないし、日本側も日本側で幕府が禁じたキリシタンのことをいつまでも残しているわけがないから、みんな捨ててしまっている。まして、転んで罪に問われなかった人たちの記録など残していない。(中略)

なぜ、こんなに記録がないかと言うと、彼らが汚点だと思われて軽蔑され、見捨てられた人間だからです。けれど、まだフェレイラやキアラはかろうじてある。あのベタツとした脂足の跡を(※紙の)踏絵に残した人たちは、もう死んでから何百年も経ち

2. 「誰にも人生の踏絵がある」——遠藤周作

ましたけれども、彼らには何の記録もないのです。彼らは本当に声が無かったのか。歴史が沈黙し、教会が沈黙し、日本も沈黙している彼らに、もう一度生命を与える、それは小説家の仕事ですよ。

彼らも、殉教した人たちと同じように人間です。そして、平凡な私たちと同じように人間です。私たちは殉教した人々を尊敬しますが、同時に私たちは転んだ人々を軽蔑することはできない。そんな資格はない。(中略)彼らも人間である以上、私は彼らに声を与えたかったのです。彼らを沈黙の灰の中から呼び起こしたかった。沈黙の灰をかき集めて、彼らの声を聴きたい。そういう意味で『沈黙』という題をつけました。併せて私は、そういう迫害時代に多くの嘆きがあり、多くの血が流れたにもかかわらず、なぜ神は黙っていたのかという、「神の沈黙」とも重ねたのです。

(『人生の踏絵』／新潮文庫、「人生にも踏絵があるのだから」21～23 ページ)

そして、遠藤さんは、「なぜ神は黙っているのか」という問いを立て、この小説に『沈黙』という題名をつけたのです。

「神の沈黙」についていえば、これは何も切支丹時代だけの問題ではありません。(中略)

私は入院の間、可哀想な子どもを何人も見ました。私も手術をずいぶん受けたけれども、私みたいにロクデナシが痛い目に遭うのはかまわん。かまわんこともないけどもさ、しょうがないと自分でも思いますよ。だけど、隣の部屋で五歳の子どもが私と同じぐらいの大手術を受けて、痛みで泣いているとね…私には、なぜそういうことがこの世の中にあるのかわからない。

なぜ神が黙っているのか、私には非常に苦痛だった。なぜ神はそういう不正に対して黙っているのか。不正というのは、法律とか政治の不正ではなくて、いわば生命の不正に対して黙っているのか。

繰り返しになるけれども、この「神の沈黙」というのが一つ。それと転んだ人間たち、沈黙のまま歴史の中に葬り去られた人間たちに命を与えたいという、その二つの気持から私は題名を決めて、主人公を選び取ったのです。

(『人生の踏絵』・新潮文庫、「人生にも踏絵があるのだから」23～24 ページ)

★ 『沈黙』は禁書扱い、ノーベル文学賞も逃す

ところで、一九六六年に発表された『沈黙』は、当時のカトリック教会から強い反撥があり、一時は禁書扱いされたといえます。たとえば、順子夫人は『明日の友』180号(婦人之友社、2009年)の対談で、作家・森禮子さんの「当時はカトリックの教会側からずいぶん非難を受けられたようですけど」という質問に、夫・遠藤さんが出席しなかったミサで、「ああいうものを書かれると困る」と神父から言われたと述べています。

また、たとえば、作家の中村真一郎さんは、『遠藤周作のすべて』(文藝春秋編、文春文庫、1998年)の中で、『沈黙』がノーベル文学賞選考でどのように扱われたか、その経緯を書いています。

あの主人公の神父が、幕府のキリシタン禁制によって、信者たちのこうむっている過酷な拷問から救うために、踏絵を踏んで棄教するのを是認する作者の考え方は、日本的仏教的な深い慈悲の心として、キリストの神としても許し得るものではないかと、私は作者の主張に共感を覚えたのだが、果たしてローマ内部の反撥は強く、「沈黙」は禁書のリストに加えられる危機を迎え、スウェーデンのノーベル賞委員会内にも、授賞反対の声が上がった。その時、強い支持を与えた英国の作家グレアム・グリーン自身が、正統派からは既に危険視扱いされていたのだった。

(『明日の友』「戦いと和解と」189 ページ)

『沈黙』には、司祭であるロドリゴが、踏絵を踏む場面があります。

「ああ」と司祭は震えた。「痛い」

「ほんの形だけのことだ。形などどうでもいいではないか」通辞は興奮し、せいていた。

「形だけ踏めばいいことだ」

司祭は足をあげた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことではなかった。自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も聖(きよ)らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみたされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと銅板のあの人は司祭にむかって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるた

め、この世に生まれ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。

こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた。

(『沈黙』・新潮文庫、VIII章 218～219 ページ)

★ 踏絵を踏み、転んだ元司祭を売ったキチジロー

かつて銀貨 30 枚でイエスを売ったユダ（イスカリオテのユダ）のように、ロドリゴを奉行所に売った、日本版ユダことキチジローが、ある夜、踏絵を踏み、転んだ元司祭、ロドリゴの許を、彼を裏切り、彼を奉行所に売ったキチジローが訪ねてきて、戸口の向こうから告解（コンヒサン：罪の許し）を与えてほしいと懇願するシーンが描かれています。

「わしはパードレを売り申した。踏絵にも足かけ申した」キチジローのあの泣くような声が続いて、「この世にはなあ、弱か者と強か者のござります。強か者はどげん責苦にもめげず、ハライズ（※天国）に参れましょうか、俺のように生まれつき弱か者は踏絵ば踏めよと役人の責苦を受ければ……」

その踏絵に私も足をかけた。あの時、この足は凹んだあの人の顔の上にあった。（中略）

その顔は今、踏絵の木の中で摩滅し凹み、哀れそうな眼をしてこちらを向いている。（踏むがいい）と哀れそうな眼差しは私に言った。

（踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから）

「主よ。あなたがいつも沈黙しておられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」

「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか」

「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」

その時彼は血と埃でよごれた足をおろした。五本の足指は愛するものの顔の真上を覆った。この烈し

い悦びと感情とをキチジローに説明することはできなかった。

「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断言できようか」司祭は戸口にむかって口早に言った。

「この国にはもう、お前の告解をきくパードレがないなら、この私が唱えよう。すべての告解の終りに言う祈りを。……安心して行きなさい」

怒ったキチジローは声を押さえて泣いていたが、やがて体を動かし去っていった。自分は不遜にも今、聖職者しか与えることのできぬ秘蹟をあの男に与えた。聖職者たちはこの冒流の行為を烈しく責めるだろうが、自分は彼等（※自分を責める聖職者たち）を裏切ってもあの人を裏切ってはいない。今までとはもっと違った形であの人を愛している。私とその愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ。たとえあの方は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。

(『沈黙』・新潮文庫、IX章 239～241 ページ)

心ならずも踏絵を踏んだロドリゴに、〈沈黙の声〉は、「踏むがいい」と言ったのです。——『私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ』——それをイエスのことばとして聞いた（沈黙の声）を、日本にやってきた「白い人」である宣教師（司祭）の視点ではなく、日本の転びキリシタン・「黄色い人」のつらく苦しい人生を通して、「苦しみの連帯」としてのドラマを描こうとした遠藤さんの思い——

遠藤さんが、かつて最愛の母・郁さんに言われた「ホーリーであれ」という言葉は、「自分ひとりだけが聖（きよ）くあれ」という意味ではありません。「ホーリーであれ」という言葉は、弱き者、病む者、孤独や不安で人生に越望している者への「苦しみの共感・連帯」を指しているのです。

遠藤さんが生きようとした「ホーリー」な思いが、いま、私の心の中で強く響いています。